

わが師 マルクス・アウレリウス帝（2）

——「最も真実なる者」の葛藤——

わが師マルクス・アウレリウスは、ローマの名門貴族の家に生まれた。小さいときからすぐれた気質を現したため、時の皇帝ハドリアヌスは「最も真実なる者（ウエリッシムス）」と呼んで彼を可愛がった。このあだ名は、すでに幼少期より、虚偽を嫌った師の性格をよく伝えている。

39歳のとき、養父であったアントニヌス帝が死に、マルクスは皇帝となった。

10代半ばからストア派の生き方に傾倒していたアウレリウスは、皇帝に就くのは気が進まなかった。また、退廃した宮廷での政務を嫌ったようである。実際、伝記作者は「アウレリウスは無理やり帝位に就けられた」とも伝えている。

しかし、帝位につくと公務を果たすため、師は帝国の経営に心血を注いだ。

それまで長い平和を楽しんでいたローマは、マルクスの治世になって多事多難の世を迎えた。争乱、戦争、天然痘、飢餓が次々と帝国を襲った。

即位早々、パルティア軍がローマ帝国の保護国だったアルメニアに侵入した。帝は保護国を守るため介入し、パルティア軍との間にパルティア戦争（161－166）が起こった。この戦争は5年間続いてローマの勝利に終わった。

その翌年には、ゲルマン人との間でゲルマニア戦争（167－180）が起こる。これはポエニ戦争以来の最大の戦争で、国家の興廃を賭けたものとなった。この戦争もゲルマン人がローマ領内へ侵入したのがきっかけで始まったもので、ローマ側から仕掛けたものではない。

しかし、戦いは13年続く泥沼の長期戦となり、国内では厭世気分に乗じた反乱さえ起きた。

58歳のとき（180年3月）、師は第2次ゲルマニア遠征の途中、駐屯地で重い疫病にかかった。

この時、師は予感したのであろう。自ら飲食を断ち死に備えた。

6日目、病状が悪化し側近たちが悲しんでいると「なぜわたしのために泣くのか。むしろこの悪疫と万人の死を思いたまえ」と、疫病の感染に苦しむ人々を思いやったという。

発病後7日目。師は息子だけに接見を許したが、感染を恐れて直ちに退出させた。その夜「最も真実なる者」は戦陣の中で息を引き取った。

こうして哲人皇帝マルクス・アウレリウスは、在位の19年間、志に反し騒乱の鎮圧と戦争の対応に忙殺され苦難に満ちた一生を終わった。

——戦塵の中の瞑想者——

この世には「瞑想する人」と「瞑想しない人」がいる。瞑想する者は、現実と距離をおいて高処から現実を、自己をそして宇宙を見つめる。瞑想しない者は、つねに目の前の些事にあわせてふためき、一生翻弄され続ける。

ビジネスの世界もこれと変わることはない。瞑想する人はまれである。多くの人は金を、地位を、名誉を求めて果てがない。ただひたすら欲望に踊らされ、心は一時も休まらず、修羅妄執に苛まれる。外的刺激に反応し、瞑想することもなく一生を空しく過ごしてしまう。

わが師はまさにこのような人物の対極にあった。皇帝在位中、ほとんど辺境の異民族との戦闘に忙殺されながら、師は瞑想を続けた。平和主義者なのに一生を戦争に捧げざるを得ない。そんな絶対的ジレンマに悩みながら、師は安心立命を求めて戦塵の中でさえ瞑想を続けた。騎馬民族サルマティ人は、ハンガリー平原を中心にローマ帝国への侵略を繰り返し、猛威を振るっていた。マルクス帝はサルマティ人と冬のドナウ川のほとりで戦って勝利し、「サルマティクス」（サルマティ人を征服した者）の称号を受けた。

苛烈な敵と戦いながら、しかし、マルクス帝は自省する。敵を憎むどころか敵を捕らえた自らを戒める。

蜘蛛は、蠅を捕まえて得意になる。狩人はうさぎを捕まえ、漁師は魚を捕まえ、ある人はサルマティの兵士を捕虜にして得意になる。だが、これらの人々の行っていることを考えてみれば、みな盗人にすぎないではないか。

「敵か味方か」で割り切るほど、皇帝は愚鈍ではなかった。

サルマティ人といっても人はさまざまであり、それぞれの人生がある。サルマティ人を全て「敵」の一文字でくくってしまったのでは、人間を見失う。サルマティ人を「敵」と見るのはローマ人の見方にすぎない。サルマティ人の目から見れば、ローマ人こそ「敵」である。

ローマ帝国を守るため、サルマティ人との戦争は避けることができなかった。皇帝はその事を悲しみ、夜の戦陣の帳の中で自省した。自己を見つめた。「果たしてわたしの行いは正しいのであろうか？」

——世俗にまみれて——

わたしの生業は、主に契約交渉とビジネス紛争の処理である。長い間熾烈なビジネスの最前線で生きてくると、精神的飢餓感は大い。「正義」とか「権利」とかの美辞麗句をかぶせ

ようと、所詮ビジネスの目的は金の分配（取り合い）につきる。より大きなパイの配分を求めて、われわれは日夜神経をすり減らす。

偽造品を販売しているので内容証明を送ったところ、逆上してどなりこんできたディスカウントストアの社長。労働仮処分で負けてもなお自らの正当性を主張して事務所まで押しかける元従業員。「欠陥車だから新車と交換しろ」と元プロレスラーの手下を連れて乗り込んでくる自称右翼……。

世間で考えられているのとは異なり、われわれの仕事はストレス潰けの厳しい職業である。そんな厳しさに耐えきれず脱落していく弁護士も多い。

仕事のストレスが昂じて落ち込んだとき、わたしはいつも『自省録』を紐といた。朝や帰りの電車の中で、わたしはわが師と対話した。

おおわが魂よ、いつの日にか君は善く、単純になるであろうか。いつの日にか愛情に満ちた優しい心ばえの味を知るであろうか。いつの日にか満ち足りて、何物をも必要とせず何物にもあこがれず、享楽のために何物も欲せぬようになるのであろうか。自らの現状に満足し、すべて現在あるものを喜ぶようになるのであろうか。

『自省録』は20代、30代を通じて、ビジネスに疲れたわたしに深い慰安を与えてくれた。朝起きぬけに手元の『自省録』を紐とくと、わたしの心は活性化した。

明け方から自分にこういいきかせておくがよい。うるさがたや、恩知らずや、横柄な奴や、裏切者や、やきもち屋や、人づきの悪い者にわたしは出くわすことだろう。この連中にこういう欠点があるのは、すべて彼らが善とは何であり、悪とは何であるかを知らないところから来るのだ。

仕事上で袋小路に入り込んで、どうにもならないとき、わが師は大いなる示唆を与えてくれた。

「この胡瓜はにがい。」棄てるがいい。「道に茨がある。」避けるがいい。それで充分だ。「なぜこんなものが世の中にあるんだろう」などと加えるな。そんなことをいったら君は自然を究めている人間に笑われるぞ。

もし君が大工や靴屋に向かって、その仕事場に作業中に出たかなな屑や削り屑がある
らって責めたら、彼らに笑われることだろう。それと同じだ。

——名著の愉しみ——

感覚が洗練されたのか、加齢のせいかな、最近わたしは「ウソウソ」したものが、生理的に疎
ましくなってきた。つき合う人も、聞く音楽も、読む本も自分の感性に合ったものに限る。
ルーズな人間、騒々しい音楽、愚劣な本に接すると不快になる。

クラシックの名曲を聞くと、わたしの体はそのリズムに共鳴する。落ち葉を踏みしめなが
ら武蔵野の遊歩道を歩くとき、わたしは深い安息と充足感に満たされる。それと同じように、
名著も人の心身に深い安息を与えることに、不覚にも長い間気がつかなかった。『自省録』
に親しんでやっとそれがわかった。

師の言葉は一語一語わたしの心に染み渡った。『自省録』を読むひととき、わたしはすべて
の妄想と雑念から解放される。かつてわたしは人生の指針を求めて『自省録』を読んだが、
今は至純な魂にふれる心地よさを求めて読む。『自省録』に親しむと、出版社が仕掛けたベ
ストセラーなど読む気がなくなる。師の端正な思索に触れると二流の思想はたちまち色あ
せてしまう。

君自身の内なるこの小さな土地に隠退することをおぼえよ。何よりもまず気を散ら
さぬこと、緊張しすぎぬこと、自由であること。

君のもっとも手近な座右の銘のうちにつぎの二つのものを用意するがよい。

その一つは、「事物は魂に触れることなく外側に静かに立って居り、煩わしいのは
ただ内心の主観からくるものにすぎない」ということ。もう一つは、「すべて君の
見るところのものは瞬く間に変化して存在しなくなるであろう」ということ。

——再びカンピドリオの丘にて——

『自省録』に出会ってから20余年を経て、わたしはカピトリノ博物館で初めて師の青銅の
騎馬像に向かい合っていた。想いは深い。青春時代、わたしはどれだけ師に助けられたこと
か。わたしは心の中で呟いた。

師よ、わたしも今や師と同じ年代になりました。師のおかげでわたしは自らへの幻
想を捨てることができました。わたしは人生にもはや幻想を抱きません。

唯一の絶対は、「万物は流転する」ということ。やがて人間も生物も滅び、地球は

大爆発して宇宙の塵に変化するでしょう。この宇宙の非情な法則を直視し、人間存在の哀しさに耐えることを教えてくれたのはあなたです。

カピトリノ博物館の一室で夜は更けていった。わたしはマルクス・アウレリウス帝を見続けた。世界最高の権力者にして、哲人の心を持った瞑想する皇帝マクルス・アウレリウス。この孤高の魂は、58年の生涯の後塵芥と化した。だがその魂は1800年に渡って光芒を放ち、多くの人に慰めを与え続けている。

9時を過ぎて博物館を出ると、さすがに夜の深い帳が迫っていた。カンピドリオの丘は、カエサルやアントニウスも戦勝祈願をしたという神聖な丘である。16世紀になってミケランジェロがこの広場を改修し、面目を一新した。広場には優美な幾何学模様が広がり、正面の市庁舎と左右の宮殿が美しいハーモニーをなしている。

コルドナータの石畳の階段をわたしは下っていった。恋人同士だろうか、幾組もの若いカップルが手を組みながらそぞろ歩きしている。大ぶりのプラタナスの黒いシルエットが街の光に淡く浮かびあがる。コルドナータに立って永遠の都ローマに直面すると、シーザーや、ポンペイウスの営みも、全て幻であることがわかる。人々の喝采の響きも今は空しく、ただ壮大な石造りの遺跡が、わずかに往時を偲ばせるばかりである。